

## 豊楽焼木具写吸物碗

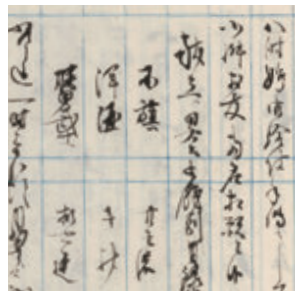
## 彭城百川の絵文字



名古屋市博物館  
だより  
2022.10.1

234

## ビールと国旗 と勝男武士 一日露戦争時の 軍隊宿泊日記と 軍事郵便—

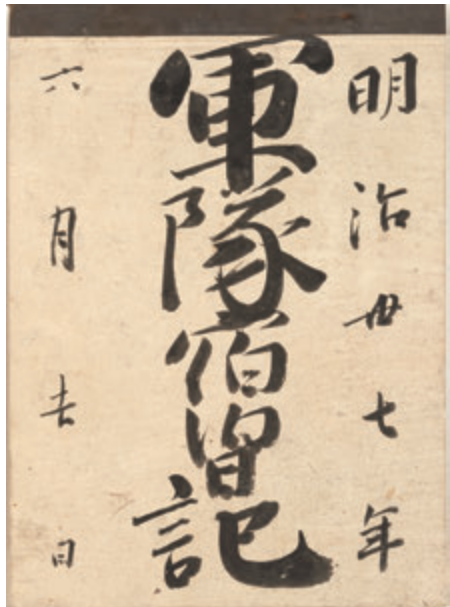


名古屋市博物館だより 234 号  
令和4年(2022) 10月1日  
年2回(10月、4月)発行

編集・発行／名古屋市博物館  
〒467-0806  
名古屋市瑞穂区瑞穂通 1-27-1  
TEL 052-853-2655  
FAX 052-853-3636  
<http://www.museum.city.nagoya.jp>

古紙を含む再生紙使用

## ビールと国旗と勝男武士 — 一日露戦争時の軍隊宿泊日記と軍事郵便 — 木村 慎平



図版1 軍隊宿泊日記 館蔵  
(伊藤次郎左衛門家資料より)

出征兵士の宿舎となった伊藤次郎左衛門家  
明治37年(1904)に始まった日露戦争では、約百万人もの軍人・軍属が戦地へ動員された。動員された兵士は各地の師団所在地に集められ、出征の日を待ったが、軍の施設だけでは収容しきれず、民間施設も宿舎として利用された。第三師団の所在地である名古屋で、そうした宿舎の一つに選ばれたのが、江戸時代以来の大手であり、のちに松坂屋百貨店を創業する呉服商・伊藤次郎左衛門の屋敷である。伊藤家には明治37年6月～8月と、同年12月～翌年1月の二度にわたり、計35名の兵士が滞在した。

当館が所蔵する「伊藤次郎左衛門家資料」のなかには、このときの記録である「軍隊宿泊日記」(図版1)と、後日

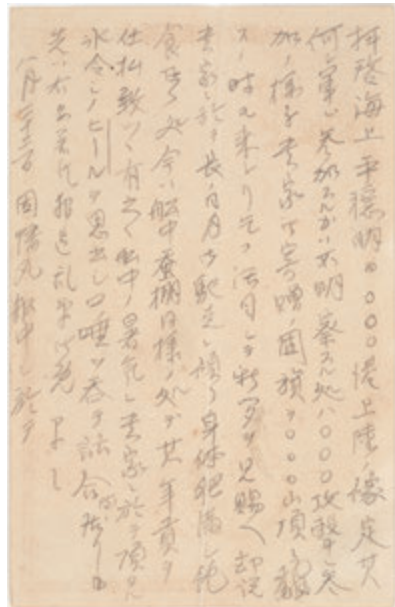
兵士たちが伊藤家に送った手紙が残されている。この資料から、伊藤家のもてなしと兵士たちとの交流の様子を読み解いてみよう。  
忘れられないビールの味

地域を代表して兵士を迎える伊藤家の意気込みがうかがえるとも言えるが、見方を変えれば出征する兵士の歓待は、地域社会が資産家に求めた役割の一つであったのかもしれない。支出の内容も興味深い。ビールなどの酒類に始まり、ホテルに注文した洋食、料亭・河文や魚半の料理まで、豪華な食事が大きな比重を占めているのである。日記を見ると、一回目の宿泊の最終日には河文から料理人を呼んで酒宴が催され、銭別には国旗と洋酒、「勝男武士(鯉節)」が手渡された(図版2)。また、二回目の宿泊の最終日には伊藤家主人みずから、大須の料亭・八千久に芸者を呼んで将校たちをもてなした(図版3)。

こうした伊藤家のもてなしは、兵士たちにとって忘れがたい記憶になったようである。ある軍曹は出征後に船中から伊藤家に送った手紙(図版4)で「御馳走に預り身体肥満(飽食)であつたが、今は狭苦しい船中でその「年貢」を支払っている」と述べ、「船中の暑気に貴家において頂たる氷冷しのビールを思出し、口唾を呑」んでいると記した。歓待の記憶は「氷冷しのビール」の味という身体的な感覚として刻み込まれたのである。

### 戦場に国旗を翻す

伊藤家と出征した兵士をつなぐものは「ビールの味」だけではなかった。ある兵士は伊藤家への手紙に「貴家御寄贈の国旗○○○山頂に翻るも近きに在るものと信じ候」(○○○は伏せ字)と記した。先ほどの「ビール」の軍曹も「貴家御寄贈の国旗を○○○山頂に翻す時も来れり」と勇ましく記している。銭別の国旗は来るべき戦勝を記念して、戦地に翻すべきものとして兵士たちに受け止められていた。国旗は兵士



図版4 兵士からの手紙 館蔵  
明治37年8月22日付

と伊藤家、さらには国家をつなぐシンボルとして機能したのである。

そのあとに続く「乞ふ、刮目して新聞を見賜へ」という一文も興味深い。銃後の人々は新聞で逐一戦況の推移を知り、軍事郵便を読むことで、そこに具体的に身近な個人の姿を重ね合わせることができた。そうした環境に置かれていることを、兵士たち自身も強く意識していたことが、この文言から読み取れる。銃後の社会にとってだけでなく、戦地の兵士たちにとっても、日露戦争はマスメディアの働きが大きな意味を持つ、新たな時代の戦争だったのである。

### 過酷な戦場への動員

勇ましく出征した兵士たちであつたが、現実の戦場は過酷であつた。陸軍の統計によれば、日露戦争で亡くなった日本軍の死者は約八万五千人とされる。第三師団に限っても死者は四千人を超える。

伊藤家に残された軍事郵便には、日露戦争最初の大規模会戦である遼陽会戦直後、明治37年9月6日に出された手紙も

ある(図版5)。遼陽会戦では日本軍・ロシア軍ともに二万人を超える死傷者を出す激しい戦いが繰り広げられた。手紙には行軍の過程が意外なほど詳しく記されるものの、さすがに戦闘の具体的な様子までは記されていない。

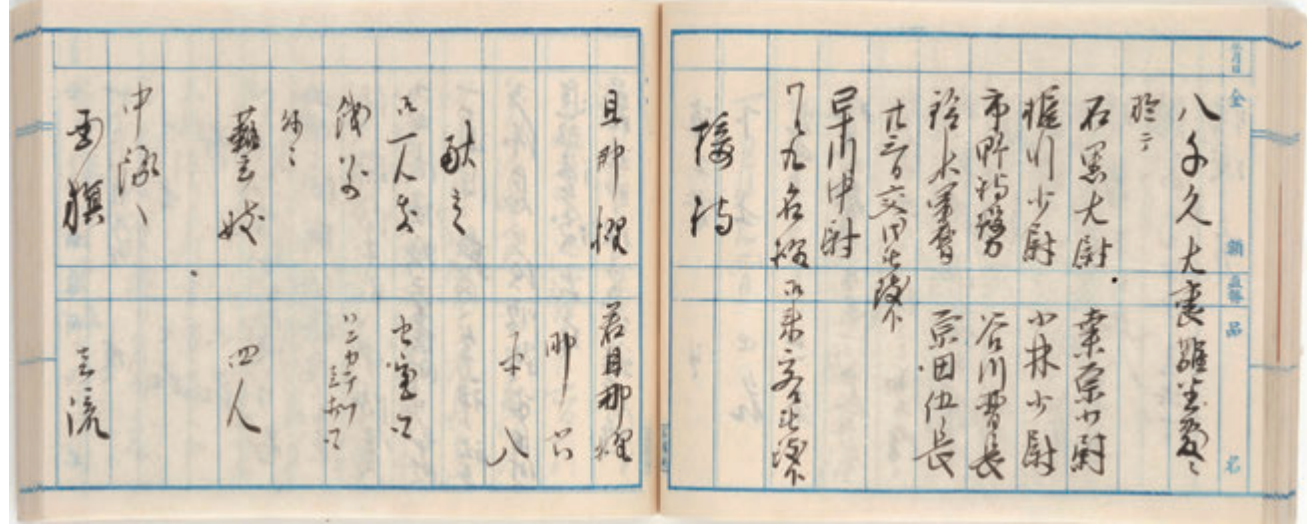
### 軍隊・兵士と地域社会

伊藤家に残された資料から過酷な戦場の実態を直接うかがうことは難しい。また、兵士たちが伊藤家に出した軍事郵便に記された文言を、安易に兵士たちの「本音」として解釈することはためられる。

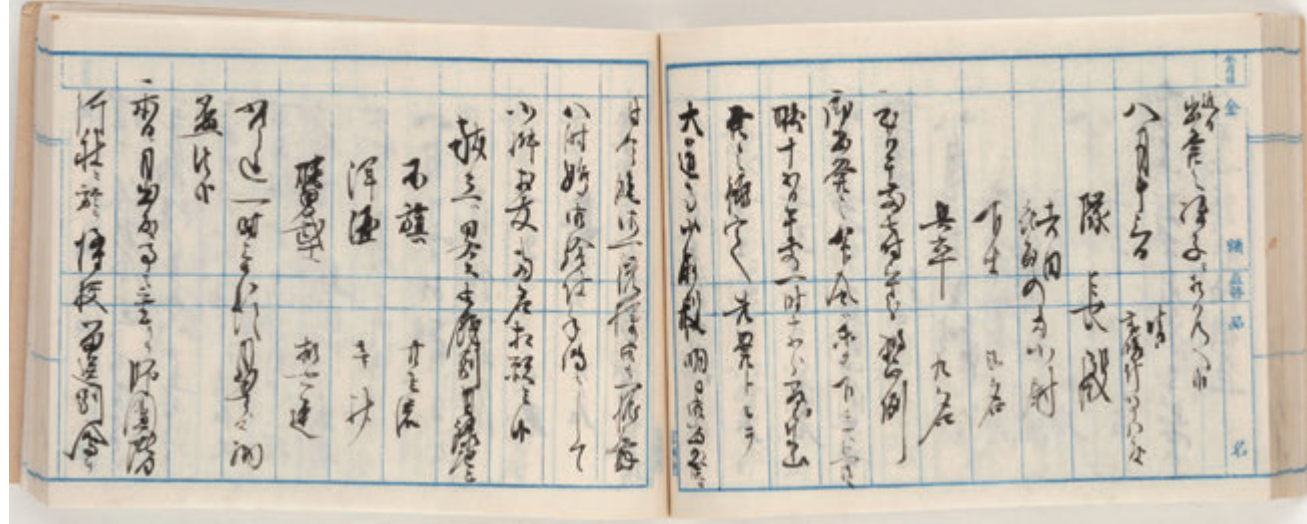
だが少なくとも、停泊地や戦地での過酷な環境と限られた時間のなかで、兵士たちが伊藤家の手紙を書く時間を割いたことは事実であり、兵士たちが伊藤家との関係を大事にしていたことを物語っている。そこに記された文言は、検閲への配慮もあるとはいえ、兵士たちが自ら選び取ったことでもある。

また、大規模な戦時動員は、軍隊や行政組織の働きのみで成立するわけではない。ここに見られる伊藤家と兵士たちの関係のように、兵士や軍隊と人びとの関係が、社会のなかに網の目のように張り巡らされていた。これらの資料は、そうした地域社会と軍隊との関係をさぐる手掛かりとして読み解かれる必要があるといえる。

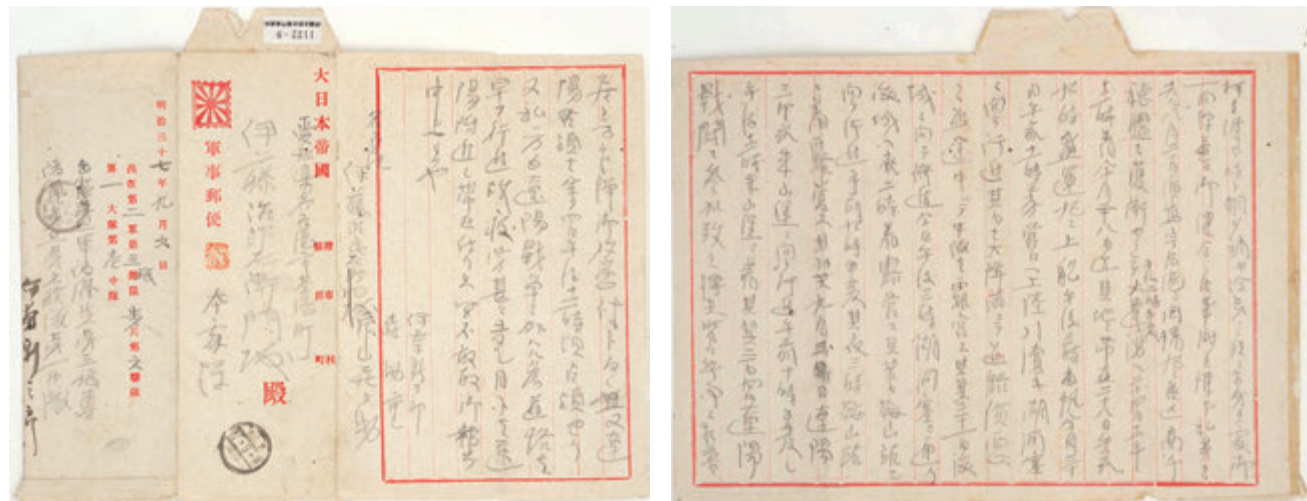
※ 白米十キロの小売価格が明治37年の東京で約一円二十二銭(日本長期統計総覧)による。令和4年で約四千円～五千円程度とした場合の概算。なお、巡査や教員の初任給と比較すると、当時の九百円は現在の千八百万円程度となる。



図版3 軍隊宿泊日記 明治38年1月24日条 右頁最終行に「接待」「旦那様 若旦那様」とあり、左頁8行目には「芸妓 四人」とある。



図版2 軍隊宿泊日記 明治37年8月13日条 銭別として「国旗」「洋酒」「勝男武士」が贈られた(左頁5行目以降)。



図版5 軍事郵便 館蔵 明治37年9月6日付 軍事郵便専用の便せんを使用。宛先住所の欄には「大日本帝国」と印字されている。



豊楽焼木具写吸物碗

塚原 明子

豊楽焼は江戸時代後期から大正年間にかけて、名古屋の大須で焼かれた陶器。なかでも木具写と呼ばれるものは、陶器の表面に漆を塗り金で蒔絵を施した、外見が漆器にみえる造りをしている。豊楽焼四代・豊助（文化10年（1813）－安政5年（1858））が考案したといわれ、豊楽焼特有のものである。館蔵のこの吸物碗は、五客一組。高台中に「豊楽」印があり、共箱の蓋書きに墨書で「名物裂吸物碗」・「御陶師五代目 豊助造（豊楽印）」としたためられており、作者は五代豊助（？～明治18年（1855））とわかる。

器の内側、陶器の肌が露出している部分には緑釉が部分的に施され、乳白色の地には鉄釉で植物が描かれている。描かれた植物は、蓋と身の組み合わせで、福寿草（新春）、蕨と蒲公英（春）、燕子花と葵（夏）、萩・薄（秋）、椿と松竹梅（冬）であり、新春を加えた春夏秋冬、四季を網羅している。器の外側には朱漆が塗られた上に、不定形の端裂のような文様が

色漆と金蒔絵で描かれ、全面に散らされている。ここで注目するのは、この裂地の中に描きこまれた文様である。

蓋に三つ、身に三つ、一客につき六つの裂地が散りばめられており、五客で合計三十を数える。いずれも輪郭がとられ金蒔絵で文様が細かく描きこまれている。

ところで、茶道の世界において仕覆など茶道具の袋物などに使用された布で、室町時代以降の舶来ものなどの由緒ある裂地のことを「名物裂」と呼ぶ。江戸時代中期以降、裂の種類が整理され特定の名称が誕生し、「名物裂」として最初に集大成されたのは、松平不昧の『古今名物類聚』名物切之部（寛政3年（1791）編）によってである。

今、ここで、本資料の文様と比較してみると、現段階で三十の裂地の文様全てを特定できてはいないが、雲雲に宝尽文の「富田金襴」の文様に酷似のもの五つ、松毬と梅花と笹蔓を組み合わせた「笹蔓緞子」に類似のもの四つ、波に跳ねる魚を配した「荒磯緞子」に類似のもの二つ、雲に鶴を配した「御朱印裂」に類似のもの二つ、入子菱の地文様の上に梅花文を散らした「藤種緞子」に類似のもの一つ、分銅繋ぎの網目地文様の上に尾長鳥が向き合う丸文を配する「白極緞子」に酷似のもの一つ、入子菱の地文様の上に五三の桐を散りばめた「嵯峨桐金襴」に類似のもの一つ。こうして見たところ、「名物裂」の文様に類似したと現段階で同定できるものが十六と半数を超えており、箱書の「名物裂」という名称は伊達ではないと思われる。ちなみに五代豊助の作として、この吸物碗の他にも、ほぼ同意匠の蒔絵が施された蓋物や二つ組重が確認されており、かなりの数が作成されたことが指摘できる。

江戸時代後期以降、名物裂が茶道具に留まらず、その文様が当時の着物、主に帯の柄に用いられ受容されていたことが

美濃派の俳書デザインと絵文字

後に専業の画家となるが、元々百川は名古屋城下本町一丁目東側にある菓屋の主人であった（入婿であったと推測される）。20代の頃から城下の旦那衆たちと俳諧に遊んでいたようだ。やがて松尾芭蕉（1644－94）の弟子である各務支考（1655－1731）に就き、俳諧に熱を上げていく。美濃に門戸を張った支考は、名古屋をはじめ各地に勢力を拡大し多くの門人たちを抱えていた。彼らは総称して「美濃派」と呼ばれるが、その美濃派の俳書や、美濃派とも縁の深い名古屋の宗匠たちの俳書に見る装飾の一つに、絵文字がある。植物や霊獣、宝玉といった具象物が寄り集まって文字（漢字）を構成する。双龍文や植物文とあわせて扉の内題等に用いられることが多かった。30歳になった百川が、初めて自ら編んだ俳書『本朝八仙集』（享保11年（1726）跋）において大々的に採用されていることから、多くの絵文字は百川の筆にかかるものと推測されている。

『歴朝聖賢篆書百体千文』の雑体書

ここでは絵文字の実例を其麦編『七化集』（宝暦2年（1752）刊）に見てみよう。四季にわたる七つの題を詠んだ内容に合わせて、「春夏秋冬」の絵文字が冒頭に掲げられている（図版1）。撰者其麦は、名古屋の俳人・武藤巴雀（1686－1752）の高弟である。巴雀と支考および百川は、俳席を共にするなど深い交流があった。本書が出版された時分、百川は生業と家庭を捨て去り、京都を拠点に文人画家として大作を手がけていたが、旧縁によって挿図を提供することになったのであろう。絵文字を構成するモチーフの密度や整ったバランスを鑑みても、『本朝八仙集』の絵文

み出したという。珊瑚や銭貨、如意、丁子などで構成される姿は、『七化集』題字「春夏秋冬」の内、「夏」の絵文字とよく似ていることが分かる（図版4）。他の絵文字の書体も、概ね同書に基づくらしい。百川は、「雑体書」と呼ばれる漢字の様々な書体に、造形美と遊び心を見出し、俳書を彩る装飾的要素の一つとして応用したのではないだろうか。



図版1 其麦 編『七化集』部分 館蔵



図版3 『歴朝聖賢篆書百体千文』のうち「尋」字



図版4 『七化集』題字「春夏秋冬」のうち「夏」字

『歴朝聖賢篆書百体千文』が載せるような雑体の篆書は、唐様の書家を中心に受容され、法帖や字書等において使用されていることが指摘される。また篆刻印の印文や縁起物の掛幅等にも転用されていくようだ。『歴朝聖賢篆書百体千文』自体、早くも正徳年間（1711－16）には和刻本が出版されており、寺島良安 編『和漢三才図会』（正徳3年（1713）序 卷15）にも「歴代文字」として数文字が引用されている。百川の目に触れる機会は十分にあっただろう。俳人から文人画家へ

美濃派をはじめとする当時の俳人たちは、中国の字書に収録された書体に興味を持ち、中国的な意匠で俳書を飾るなど、中国趣味を共有していたことが想定される。同じく支考と関係の深い名古屋の俳人・太田巴静（1678－1744）による春興帖『廿日正月』（享保16年（1731）刊）も、濃厚な中国趣味を感じさせる俳書である（図版5）。団扇形の梅図に絵文字風の書題「廿日正月」を配した瀟洒な題簽が印象的だ。百川が本格的な文人画を手がけるようになったのは、名古屋を離れ、京都にて活動するようになった頃からと思われる。しかしながら、文人画をはじめとする中国文化への興味は、名古屋時代の俳壇における活動や交流のなかで醸成されたものと推測される。漢詩文を読みこなし、換骨奪胎して当世風に詠み替える俳人たちが、中国の文物に関心を持つことは当然の成り行きであろう。日本文人画の先駆者が俳人であったことは、単なる偶然では無いのである。



豊楽焼木具写吸物碗 五代豊助（?～明治18年[1855]） 館蔵

指摘されているが、この吸物碗は箱書きの通り、名物裂が器の意匠の世界においても受容されていたことを示している。

【参考文献】

名古屋博物館企画展図録「名古屋のやきもの豊楽焼 平成7年 長崎蔵「名物裂」の概念の成立と受容の実態」『共立女子大学・共立女子短期大学総合文化研究所紀要』第21号 平成27年 学統舎文化研究所紀要 淡交社 平成27年 『名物裂ハンドブック』 山邊知行監修「名物裂」毎日新聞社 昭和53年



図版2 孫枝秀 編『歴朝聖賢篆書百体千文』 名古屋市蓬左文庫蔵

字に比肩する出来栄である。

こうした絵文字の出典として考えられる字書が、中国で出版された孫枝秀 編『歴朝聖賢篆書百体千文』（康熙24年（1685）序）である（図版2）。漢字の基本学習に用いる千字文を8字ずつ、125体の書体で書き分けて収録する。それぞれの書体は、絵文字と呼ぶべき様相で意匠化されたものが多く、古代に遡る歴史や由来等が付記されている。書体の一例である「八宝文」を取り上げよう（図版3）。三国時代の能書家として名高い韋誕（181－253）が、古い天子の陵から出土した宝玉や銭貨をかたどって、この文字を編



図版5 太田巴静 編『廿日正月』 館蔵

【参考文献】

清水孝之「『彭城百川の俳諧―その前半生―』愛知県立芸術大学紀要」13、1983年3月 名古屋博物館編集 発行「知られざる南画家百川」1984年3月 岩坪充雄「江戸時代の書物と雑体篆書」『書物・出版と社会変容』15、2013年10月